研究主題

「安心して学べる環境を設定し、コミュニケーションに対する意欲を高める指導の工夫 ―特別支援教室における鑑賞教材の活用を通して―」

東京都教職員研修センター 研修部　専門教育向上課
葛飾区立西亀有小学校　主任教諭　伊　藤　陽　平

第１　研究のねらい

本研究は、二つの課題に対して、安心して学べる環境での鑑賞教材を活用した自立活動の指導の工夫を通して解決を図ることを目的としている。

第一の課題は、特別支援教育の一層の推進である。文部科学省が平成 30 年に実施した「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」では、「学習面か行動面に著しい困難を示す」児童生徒の割合は 10 年前比 2.3 ポイント増加しているとともに、東京都教育施策大綱においても「様々な状況の子供たちが、学習活動に参加している実感や達成感を得ながら充実した時間を過ごせるよう、柔軟な仕組みによる多様な学びの場を創出し、多様な個性を持つ子供たちが互いを認め、尊重し合いながら学ぶ環境を整えていく」ことが挙げられているためである。

第二の課題は、コミュニケーションの困難さへの支援である。国の「令和２年度通級による指導実施状況調査」によると、通級による指導を受けている都の児童のうち、自閉症、情緒障害の児童の割合が約５割を占めている。中教審答申（令和３年 1 月）「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」においては、「どのような時代であっても変わらず重要」なものの一つとして「対面でのコミュニケーションを通じて人間関係を築く力」が記されている。

以上より「児童の実態に合わせた安心して学べる環境の設定」と「鑑賞教材を活用した小集団指導」の二つの視点を設定し、巡回指導教員と在籍学級担任とが情報を共有しつつ自立活動を行うことで、課題解決に資すると考えた。

第２　研究仮説

○巡回指導教員は在籍学級担任と対象児童の情報を継続的に共有し、安心して学べる環境を設定し、鑑賞教材を通した自立活動の指導をすることで、児童は、自分の思いや考えを適切に伝えたり、多様な考えを受け止めたりしながら、コミュニケーションに対する意欲を高めることができるであろう。

第３　研究の内容と方法

１　基礎研究

（１）通常の学級と特別支援教室における現状と課題の把握
（２）鑑賞教材を活用した先行研究、文献の整理
（３）障害種別から予想される必要な指導内容の整理
（４）コミュニケーション能力と意欲の捉え方と育成する方法、方策の整理

２　調査研究

（１）教職員対象調査の結果

都内特別支援教室拠点校 11 校の巡回指導教員を対象に、調査を行い、47 名から回答を得た（図１）。巡回指導教員は、担任との継続的に連携した指導について全体的に肯定的に捉えていた。学期途中の指導、支援のあり方の改善は比較的難しい結果だった。また、各校に１名配置されている特別支援教室専門員対象の調査において、「特別支援教室の連絡帳を通した継続的な情報共有」に対し、５割が「担任、巡回指導教員間の情報共有不足」を挙げており、連携した指導に関する認識の差も明らかになった。

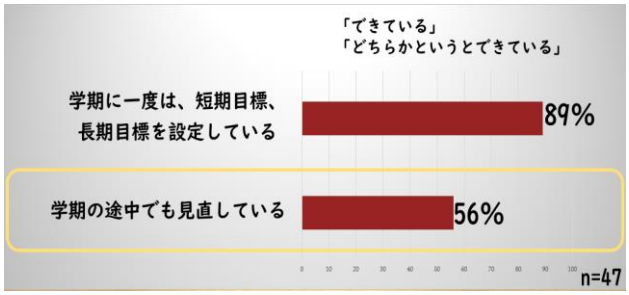

図１　在籍学級担任との連携した指導について

（２）児童対象調査の結果

特別支援教室に通室する児童５名を対象に、面接調査を行い、回答を得た。児童からは、学校において先生や友達と積極的に会話をしている実態が分かった。一方で、「授業中に考えたことを先生や友達に伝えることは好きではない」という児童が半数以上おり、状況、場面によってコミュニケーションに対する意欲が変わる可能性が示された。また、全ての児童が「図工などの授業において、友達の作品を見たり、感想を伝えたりすることは好き」であった。

以上の結果から、コミュニケーションに対する意欲を高めるには、話しやすい環境設定と、話題（教材）の工夫が重要であると考え、開発研究に取り組んだ。

３　開発研究

（１）「鑑賞教材」ガイドブックと実用事例集

国立美術館の所属作品を活用するウェブサイト「鑑賞素材 BOX」を参考資料として、多様な視点で捉えられる作品、背景を想像できる作品を精選し、授業を行った。鑑賞教材とはどのようなものかを知るための「ガイドブック」と、教材の提示から、デジタル機器の活用法、発問等をまとめた実用事例集を作成した。

資料提供：国立アートリサーチセンター　鑑賞素材 BOX
https://box.artmuseums.go.jp/index.php

ガイドブック

（２）教員間の連携を深め、安心した環境を整えるための連絡帳

連絡帳上部に長期目標、短期目標の欄を設け、常に目標が意識できるようにした。

「１　活動の様子」「２　有効だった支援」「３　高まった力または、予定通りいかなかった原因」「４　次の指導までに家庭、在籍学級で見てもらいたい姿」の欄を設定した。

この連絡帳を使用して、担任に「自立活動において援助申請ができるようになったこと」を伝えると、担任からも、在籍学級でも児童自ら援助申請する姿が見られたという報告があった。また、活動の中での児童の様子が特別支援教室専門員に伝わることで、児童観察の視点が明確になり、それを基に観察をしてもらうことで、在籍学級での指導や、その後の自立活動の指導に良い影響の出たケースもあった。今後は、連携の程度と影響に着目した研究が期待される。

４　検証授業（令和５年 11 月 30 日（木）から令和５年 12 月 14 日（木）まで）

（１）対象　都内公立学校　低・中・高学年、児童５名

（２）目的　ア　児童の実態に合わせた継続的に安心して学べる環境設定の検証

イ　鑑賞教材の妥当性の検証

ウ　デジタル機器を活用した指導の工夫の検証

（３）検証授業の分析

ア　安心して学べる環境の設定の検証

初回の授業や活動のやり方を変更した際に、児童からは、不安そうな様子や活動を開始するまでに時間がかかる様子が見られた。児童がSTへ支援を求めた場面は、デジタル機器の活用の際に各自、数回ずつあったが、授業を重ねる毎にほとんどなくなった。学習の見通しがもてたこと、学習方法に慣れたことも児童にとって安心して学べる環境につながったと考える。

鑑賞教材を活用した授業内での発言回数は、回を重ねるごとに増加した（図２）。背景を考えることのできる鑑賞教材の精選や、デジタル機器を活用し、事前に考えを整理したこと、教員のファシリテーション（例：全体への問いかけや、多様な考えを共有するための板書の工夫）が有効であったことが発言回数の増加の要因として考えられる。

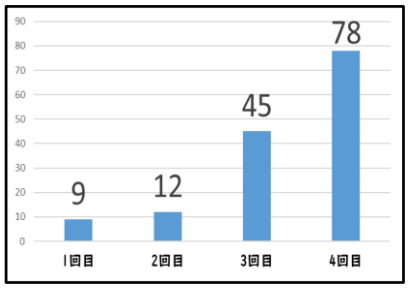

図２　授業ごとの児童の発言回数の合計

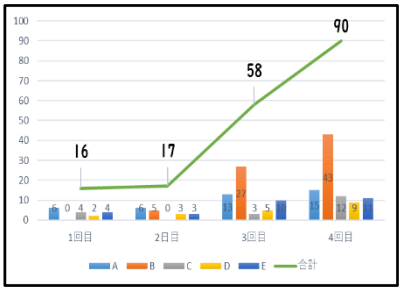

図３　教員がファシリテーションした場面での発言文節数の推移

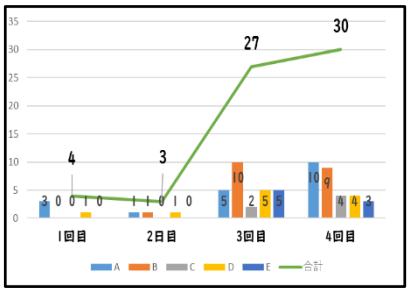

図４　教員の問いに対して児童が考えを述べられている回数

イ　鑑賞教材の妥当性の検証

発言文節数や（図３）、教師の問いかけに対する発言回数（図４）も授業を重ねるごとに増加した。鑑賞教材を基にした活動を通して、自分なりの考えをもち、単語による発言ではなく、理由をもとに、詳しく考えを表出することができる児童が増えてきたと想定できる。

全授業終了時の「活動のめあて」に関するワークシートにて、５人の児童全員が「理由をも

とに自分の考えを伝えられた」、「友達の考えを受け入れることができた」と回答した。

以上のことから、児童のコミュニケーションに対する意欲を高めるための鑑賞教材には、一定の妥当性が確認できた。

ただし、図４を個々の児童に着目して見ると、あまり増加していない児童もいるため、個々に応じたファシリテーションについて、今後さらなる研究の必要性がある。

また、児童の実態により合致した鑑賞教材及びコミュニケーションの意欲に影響する要因についても、今後、検討をする。

ウ　コミュニケーションの意欲を高めるためのデジタル機器を活用した指導の工夫の検討

デジタル機器を活用し、鑑賞教材を観る上での視点を明確にして、考えを共有できるようにした。教材を観る際の視点（項目）をカードにして配布し、それぞれの児童は、考えを発表できそうなカードを広場に送る（図５）。広場に送られた考え（図６）を全体で共有しながら、考えを広めたり、深めたりすることで、児童の考えの表出回数が、１回目の授業の４回（一人当たり１枚）から、４回目の授業では 21 回（一人当たり４から５枚）に増加した（図７）。

一方で、デジタル機器を活用することは、表出を促すものの、図３や図４と比べてその増加は緩やかであった。

以上のことから、デジタル機器の活用を通して、教員が安心して学べる環境を設定したことで、児童はコミュニケーションの意欲を高めることができた。

図５　「各自のノート」

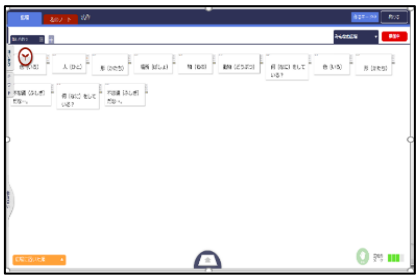

図６　「広場」

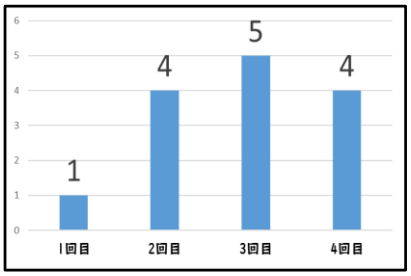

図７　児童一人あたりのデジタル機器による考えの表出回数（回）

第４　研究の成果と今後の課題

（成果）

・鑑賞教材を活用し、デジタル機器の活用や教員のファシリテーションを手だてとして工夫することで、児童のコミュニケーションの意欲を高めることができた。

・連絡帳の形式や記載内容を工夫し、他の教員と連携を図ることで、継続して指導目標を共有し、在籍学級と連携を深め、指導、支援をすることができた。

（課題）

・児童の多様な実態に、合致した鑑賞教材の精選、ファシリテーションの方法を模索する。

・コミュニケーションの意欲の向上との関係性を証明するための様々な要因、分析方法を模索する。